

# 野鳥たより

—北海道—

第 12 号

編集者 北海道野鳥愛護会  
発行者 北海道国土緑化推進委員会  
発行日 昭和47年11月  
5月・8月・11月・2月 年4回発行



キレンジャクの群 札幌市白石北郷にて 47年4月2日  
撮影 新宮康生



## タンチョウの保護問題に思う

米国コーネル大学のジョージ・アーチボルド博士が今年の夏発表したタンチョウの保護についてのレポートは道内のみでなく、全国的に大きな反響を呼びおこした。その内容は、タンチョウが生息地を開発されて絶滅の危機を迎えている、ということであったが、同時に博士が明らかにした、タンチョウを米国に持ち帰りたいという希望の方がむしろクローズアップされてしまい、湿原の保存についての主張はやや霞んだ感があった。しかし、最近になって、環境庁等による調査が行なわれ、地元を中心として湿原の利用と保存に対する社会の関心もたかまってきた。ここに博士のレポートを要約し、その後の動きにもふれながら、タンチョウの保護の問題を考えてみたい。

### ■アーチボルド博士のレポート（要約）

#### A 冬の生活

11月から4月まで、タンチョウは人間により給餌されている。主な給餌場は、阿寒（75羽）と下雪裡（50羽）で、その他小さなものを合わせて140羽以上が給餌されている。給餌場には午前中に来て日没直後に去り、こもらない水辺のひらけた場所をめぐらしている。

1971～2年の冬には、総数の12%にあたる22羽のタンチョウが送電線に触れて死亡した。事故はとくに下雪裡で多く起っている。この対策として送電線を地下に埋めるとともに、近くの下幌呂給餌場を強化しなければならない。

また、風蓮湖の近くに新しい給餌場をつくり、根室地方のタンチョウが冬も釧路に渡らないようにし、群を分けるほうが多くの点で有利である。

#### B 繁殖期のタンチョウ

3月末になると、タンチョウの主食は水生の小動物に変わる。1つがいのテリトリー（なわばり）は2～7km<sup>2</sup>である。いま指定されている5,000haほどの天然記念物区域には3つがいしか見られず、少なくとも49つがいは指定区域外の保護されていないところにいる。

網走・釧路・根室・十勝地方で52～53つがいのタンチョウが発見された。これらはすべて繁殖するものと考えられた。つがいを組まない成鳥と、2歳以下の若鳥はほ

とんど見つからなかった。

タンチョウの生息地をおびやかすものには、次の4つがある。

#### (1) 農業

多くの小さな湿原と、釧路湿原・風蓮湖湿原の重要なところは排水され、酪農用草地にされている。これがいまの割合で進めば、数年間のうちに繁殖地の95%が失われてしまう。小さな排水溝を1本掘るだけでも湿原の水位は下り、タンチョウの繁殖はできなくなる。

#### (2) 林業

大手の製紙会社によって、釧路湿原のまわりの丘の森林はなくなった。森林を皆伐したため湿原に泥が流れこみ、湿原の水位を下げ、また、春には氾濫して湿原を荒廃させてゆく。

#### (3) 工業

北海道開発庁は道内数カ所に大規模工業基地を計画しており、釧路湿原の南半分もそのひとつである。1972年に見つかった53つがいのタンチョウのうち、29つがいはこのような開発地帯にいた。

#### (4) 道路

ベカンベウシ川流域をとる車道の計画がある。これは少なくとも5つがいの繁殖地を破壊することになる。

湿原の大部分は国有地であるが、タンチョウにとって大切な場所は民間等に払下げられている。いま大蔵省などが持っている国有地は環境庁に移し、保護区にするのがよい。

#### C 衛星タンチョウ保護区

十勝から根室に至る21の湿原を「衛星タンチョウ保護区」にすることが望ましい。そのうち釧路と風蓮を中核とし、それぞれ16と14つがいを、その他の19カ所に23～24つがいを保護する。2つの中核保護区の近くに給餌場をつくれば、タンチョウは効果的に分散される。

衛星タンチョウ保護区では、湿原の自然環境やタンチョウの行動に影響を及ぼすすべての行為を禁止しなければならない。

湿原のまわりの丘陵も、湿原と同じように保護されなければならない。また、保護区には政府が監視人を置く必要がある。

(このレポートには、他に「タンチョウは渡らない」ということを、7つの理由をつけて論じているところがあるが、それは省略する。なお、全文の訳は日本野鳥の会機関誌「野鳥」47年9月号に載っている)

#### ■明らかにされた問題点

アーチボルド博士はこのレポートを道、環境庁、文化庁等に提出し、また自身上京して各方面にタンチョウの危機を訴えるなど、精力的な活動を行なった。タンチョウの数はここ2、3年ほど明らかに頭打ちの状態にあるが、その保護には輝かしい歴史をもっているだけに、絶滅さえ心配される、というのはショッキングであった。問題として明らかにされた点は、次のとおりである。

(1) タンチョウの生息適地が急速にせばめられていること。

釧路湿原では、南側は釧路西港建設にともない、工業用地の造成などが行なわれている。また、北・西部では酪農経営の規模拡大のため草地造成の計画が多く、ある部分ではすでに排水路工事が完了している。根室地方でも、風蓮湖西部一帯に新酪農村建設計画があり、湿原が草地化される可能性がある。

(2) いままでのタンチョウの保護対策が、あまりに個体中心でありすぎ、生息環境の保全について努力が足りなかったこと。

たとえタンチョウが特別天然記念物に指定され、冬には給餌されるとしても(給餌が冬の死亡率を低くした功績は、もちろん大きいのだが)、それだけでタンチョウの生活が成立つわけではない。春から秋にかけての住み場所である湿原が、十分に確保されていなかったことは認めなければならないであろう。

(3) タンチョウの生活について基礎的な資料が不足していること。

たとえば、個体を見分けるために標識をつけることはまったくされていず、また、そのための安全で効果的な捕獲方法もたしかめられていない。だから、ある場所で繁殖するタンチョウが毎年同じ鳥であるかどうか、はっきりとはわからない。若鳥の行動なども、ほとんど知られていない。

湿原を開発し、利用する技術がなかった時代には、いまの保護対策は効果をあげることができた。しかし、これからは、タンチョウの習性を調べ、それが生活する場所を確保する方法をとらなければならない、ということなのである。

#### ■その後の動き

アーチボルド博士の呼びかけがきっかけになったものか、今年の夏から秋にかけて、北海道教育委員会と環境庁がそれぞれ独自にタンチョウの調査を実施した。

これらの調査は、ともに来年以後も継続される含みをもっており、今年度はむしろ予備的な調査であった。したがって、タンチョウ保護のための根本的な方策がつくられるにはまだまだ時間がかかりそうであるし、たとえそれができても、いま進められている開発事業との調整は、きわめてむずかしい作業になるであろう。自然保護が問題になる他の多くの場合と同じように、ここでも保護側は大きな遅れをとってしまっている。

また、釧路市では、釧路湿原の利用と保護について利害の異なる関係者の意見を求めるため、シンポジウムを開くという。このための保護側の構想として、教育大釧路分校の田中教授による国定公園化案がすでに公表されている。住民の関心をたかめ、地域計画に住民参加の道をひらくため、このような試みがなされるのは良いことである。

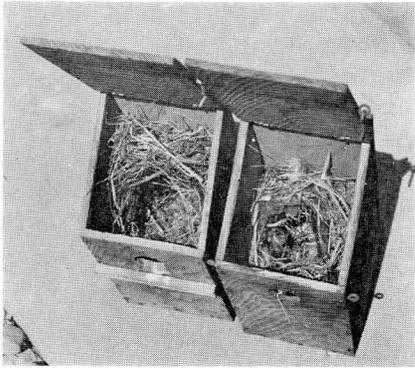
タンチョウの保護はいま大きな曲り角に来ている。一部の人々の献身的な努力にすべてを委ねておいてよい時代は過ぎた。開発による利益と、タンチョウを失うことによる損失を同じ次元では評価できないことが理解されるなら、これからは近代的な保護施策がとられなければならない。それは、タンチョウ自身の状態や、タンチョウを囲む外的条件をいつも把握し、施策にフィードバックできるシステムでなければならない。われわれは、いままですめられている調査の結果が、とかくお役所仕事がおちいりがちな場当りの解決策につながらないよう、この問題を注意深く見つめてゆく必要がある。



# 鳥のノート (2)

土屋文男

メのヒナがいる  
左側は巣立ち直後、右側はスズ



## 巣箱とネコ

わが家の巣箱は利用率が高かった。7コかけたもの全部が利用され、シジュウカラとスズメがヒナを育てたこともあった。何れも形が少々違っている。ものずきにスズメの卵の数や重量、体長、体重を計測してみたこともあった。体重を計測するには、ヒナの小さいときは上皿天秤(薬品用)を、羽根が生えてバタバタするようになったときは、段ボール紙の細い筒を造って、その中へひょいと押しこんでから測るのである。取材に来たNHKや毎日新聞の記者が、「乳幼児の健康診断みたいですね」といった。当時は巣材も計量し、材質を区分してメモした。ワラをフクシンやマラカイト・グリーンなどの細菌用の染色液で一部を染めておくと、どの距離から親鳥が運搬したかが判る。庭でホロホロチョウやキンケイを飼っていたので、この羽根を利用した。シジュウカラの方

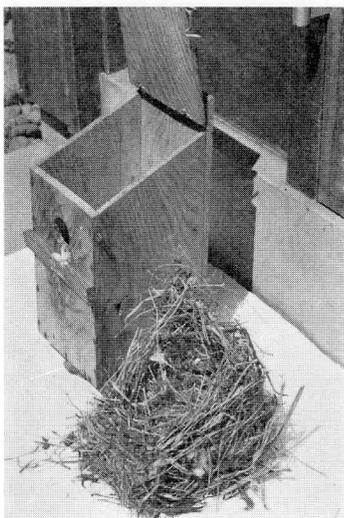
利用された各種の鳥の羽根



はわが家のイソの毛が主材であったが、スズメの方はおもいがけないものを運んだ。家のものには「これは一大研究である」とPRしたが、「スズメの研究なんてバカらしい」と一笑に付されてしまった。その後多忙になって、いつとはなく中止したが、小鳥たちの方は毎年せせとヒナを育てていた。

ことしはシジュウカラが営巣しなかった。フシギに思っ調べてみたところ、ネコのせいだったのである。最近、ネコを飼う家がやたらと増え、先日テレビで生きた小鳥をオトリにノラネコ捕獲をやっているニュースがあったが、ネコの多くなったことは事実らしい。最近、ネコ専門のペット雑誌(月刊)まで出ているそうである。2、3匹のネコが家の周囲をうろろしているのに気がついたのはずっと後のことだが、ネコのとどきそうな危険性のある巣箱は全部利用されなかった。餌台にはスズメたちが集まっていたが、ネコの犠牲になってはふびんなので、給餌も中止した。ことしの冬はネコに襲われない餌台の作製と明春はネコのストレスから逃避できる巣箱の場所をきめるのが火急のことうである。

(本会副会長)



右は取りだした巣材  
最もスペースを小さくした巣箱のひとつ。



トウモロコシ  
とスズメ

## ヤマセミ撮影記

入江 智一

ヤマセミ、おそらくほとんどの人が実物におめにかかったことはない鳥だろう。限られた谷川の周辺にわずか1つがい、2つがいくらいしか生息していないといわれる。同じカワセミ科のカワセミやアカショウビンに比べると体ははるかに大きくて、カケス大である。キャラツ・キャラツと鳴きながら水面近くを低空飛行し、いつも一定の場所にとまる習性がある。極めて警戒心が強く、私の体験からいえば50m以内に接近することは困難である。ヤマセミの行動範囲は谷川沿いに4km前後におよぶ。

そのヤマセミが今年も去年に引き続いてまた同じ場所にやって来るようになった。それがわかったのは、つい最近のことである。私が初めて、ヤマセミ撮影に取り組んだのは、昨年の大晦日であった。その日は朝の5時に家を出発し、深い雪道を歩いて、目的地に行きカイトを2つも抱えながら、1時間もヤマセミが来るのを待ち続けたものだ。今年は連続4日間も行ったが一度もヤマセミのとまっている姿を見ることができなかった。特に3日目などはその前日までに続けて行なったためか、手製のブラインドの中で2時間もちじこまって待っていたのにととうとうヤマセミはこなかった。私はヤマセミがこれほど警戒心が強いとは、思ってもみなかったのである。それから数日間おいてから再びでかけてみた。こんどは色々ブラインドの位置を変えてみたが、やはりだめであった。

撮影に取り組んでから10日目、ほんの一瞬だがファインダーの中に念願のヤマセミの姿を見ることができた。この時のたとえようもない感動は今でも記憶が生々しい。翌日とうとうヤマセミの姿をカメラにおさめること

ができた。その日はヤマセミが鳴声をあげるときに一瞬尾を上打ちあげること、どじょうを食べていたが、首を左右に5、6回ふってどじょうを枝にたたきつけた後のみ込むというアカショウビンに似た習性などを観察した。なお、同じ場所に飛来する時刻の記録は表に示す通りである。2羽としたのは、雌雄の判別ができない場合で、幼鳥であるかも知れない。表に示されるように、飛来の時刻は、次第に早くなっていることがわかるが、今後さらに観察を進めていながら、その意味を考察してみたい。



私はヤマセミが大好きだ。何となく近寄り難い気むずかし屋ではあるが、いつからかそんな彼に親しみを抱いてしまった。ヤマセミの生態写真は意外に少ない。いつになるかはわからないが、雌雄一緒の光景や飛んでいる瞬間の彼の姿をカメラにおさめたいと思っている。

ヤマセミの飛来時刻 (1972)

月	日	飛来時刻	飛び去った時刻	備考
9月	12日	前 6:15	前 6:30	2羽
	13日	前 5:54	—	♂ 1羽
	15日	前 5:50	—	2羽
	21日	前 5:30	—	2羽
	22日	前 5:35	—	2羽
10月	6日	前 5:42	前 5:45	2羽
	7日	前 5:28	前 6:00	2羽
	8日	前 5:27	前 6:15	2羽

## 衰れだったイワツバメ

山田 良造

石狩川を上川管内愛別町まで溯ると、川の汚れもなく清らかな流れになる。この流れにかかる愛別橋にイワツバメが住みつき、雪どけとともに南方から渡ってきて9月末ころ帰ってゆく。

私は、イワツバメのコロニーを知床の断崖や室蘭の岩壁、道南の駅舎等でみてきましたが、愛別橋のイワツバメは道北上川地方では規模の大きい繁殖地です。橋の長さ170mの橋げたに泥と枯草で徳利形の巣を作り、400羽位生息している。青田や川原の上をすいすいと飛び交す自然の風情はすばらしい。

このイワツバメたちに、悲しいことが今春雪どけとともに起こりました。老朽化した橋を長さ200mの新しい橋に架け替えする工事がはじまり、私が観察に行ったときは工事の衝撃で、春早々に生れたヒナが川に落ち、橋のたもとにある駐在さんがヒナ4羽を救い上げ、上川支

庁に届けたことを知りました。

5月27日、旭川野鳥の会ではイワツバメを保護するため現地調査し、その後、畠山周治会長を中心に何回か愛別橋に通い、

◎工事関係者には9月に入るとヒナが巣立ちするのでそれまで古い橋の取壊しをのばしてもらいたい。

◎愛別町には、イワツバメの家というような保護のためのアイデアを出してもらいたう。

◎上川支庁には、イワツバメ保護に協力してもらいたい。

等お願いしました。

このとき工事関係者は、9月まで古い橋は壊さない説明があり無事にそれまでには巣立つだろうと、イワツバメにとって明るい見とおしでした。

8月13日、愛別橋の工事が進み、いよいよ取りこわしの段に入り、イワツバメのマイホームも壊されるハメになった。崩れると橋と一緒に数10羽のヒナは、石狩川の流れに消えました。

それを知った駐在さんは、網でおぼれるヒナを34羽救い上げ上川支庁を通じ旭山動物園に保護しました。動物園では、餌づけがうまくいかず、10羽余り残しつぎつぎ死んでいった。とうとう緑の山や野を飛ぶことができずもう少しだった巣立ちを前に哀れなイワツバメだったと思います。

一部残っている橋げたのイワツバメも例年より早く、9月7日南方めざし旅立って行きました。

愛別町の人たちの愛情に見守られ繁殖しているイワツバメを、私たちの自然の友として来年もきつときてくれることを祈っています。私たち人間の身近に生活し、人間にさまざまな利益をもたらしているイワツバメだけにこんどこそ安心して住める環境づくりに手をさしのべ保護してゆきたい。(旭川市在住)



## 思い出の野鳥

門崎和子

私が野鳥に興味をもつようになったのは、たしか昭和38、9年頃からと思います。

私の実家が札幌の藻岩山と円山の間に近いところにあったこと、近所が庭のある家が多かったため、樹木も多く四季を通して種々の小鳥が庭に来るので楽しめたことにあります。初めのうちは図鑑もなく、自分の目で見た鳥の特徴をノートしておいて、街へ行ったときに本屋で図鑑を立ち見してきては名前を覚えてゆきました。

そのうちに自分の庭だけでなく、近くの山や公園に出かけるようになり、野外に出ることの素晴らしさを知ったのです。

今までに見た沢山の野鳥の中から、思い出に残る何種類かの鳥について書いてみることにしました。

**オオルリ** 藤の沢のヘルスランドへ行ったときのこと。そこは庭が広く自然のまま、私は何種類かの野鳥を見た後、目の先3、4mのところ、青い色の鳥を見た。はじめてのことで胸がドキドキする。急いでカメラ

のピントを合わせた。そのオオルリは逃げもせず、私を逆に見ている気がした。おかげで、とても良く見られた。それ以後は野幌の原始林で一度チラッと見ただけでした。

**ウグイス** はじめて耳にしたのはある秋のこと、地鳴きではあったが自宅裏の笹やぶの中で聞いた。数年して野幌原始林で春に、同じく笹やぶの中での声に立ち止りつつ近より1m以内での囀りは、いくら聞いてもあきないほど良かった。姿もそのうち見ることができて安心したものです。

**キバタキ** 何年か前にチラリと、ほんの1、2秒間黒黄白の混った動くものを目にした。チョウの出る頃でもないのに見たので鳥だと思ったが、それも自信がなかった。その後2、3年して中の島の精進川畔公園へ行った時にまた出会った。7、8m先の木の枝に止っている双眼鏡で見るとその美しいこと、とても嬉しくなった。この鳥の囀りは格別に美しい、それにしてもあの鳥の毛

色はなんと不思議な組合せにできているものだと私は思いました。

**シジュウカラ** ある日野幌原始林の横道に入った。前年にアカゲラが巣を作った木の穴がある。また立ち寄って耳を当てて見た。するとゴトゴトと音がする。私はしばらく耳を木に当てていた。そのうち頭の上の穴の中から何か飛び出した。私はビックリしたが、近くの木で警戒の声を上げているシジュウカラを見た。私と同じにシジュウカラも驚いたのでしょう。

**ヤマガラ** ある曇った日に原始林を歩いていると、耳に鳥の鋭い声をした。近くへ行ってみると木の枝でヤマガラが2羽、騒いでいる。良く見ると近くの木にかけた巣箱にヘビが入り込んでいた。それがヤマガラの巣かどうかわからないが、きっと仲間に危険を知らせると共

に助けを求めていたのかもしれない。

**アカエリヒレアシシギ** 今年の5月、この会に入るために道庁へ行った。その日は小雨が降っていて構内も人数が少なかった。

道庁の池を何気なく見ると、水鳥が1羽遊んでいた。私は用件を済ませて1時間後に立ち寄ると相変わらず池にいる。太い立木の陰にかくれて特徴をメモする。1時間ほどねばったが、双眼鏡を持ち合わせていなかったことが非常に残念でした。人が少ないのでその鳥も安心していろいろす。私には初めての鳥でしたので後で図鑑を見ると、アカエリヒレアシシギであることがわかりました。

このように野鳥を見ていると色々なことがあります。これからも何が起るか知れないが楽しみです。

(江別市大麻在住主婦)



## 鳥 語 (3)

三 浦 五 郎

野鳥が近くに来るところを宅地に求めていたところ、北ノ沢に恰好の場所が見つかった。案内の車で訪れたとき、丁度、ヒクイナが雛を連れ一列縦隊になって、ヨチヨチ、道路を横断遊ばしているのに出合った。車に驚いて親と先の2羽はあわてて左の叢に駆込み、あとの2羽は出てきた溝の暗い茂みに潜ってしまった。雛がはぐれないようにするのか、我々の注意を自分に引きつけようとするのか、親鳥は必死に鳴き続けていた。

他の条件も満足できたし、このようなことが私や家族達を気に入らせてしまっ翌年この土地に家を建てた。

工事にかかったのは、クロツグミ、アカハラが朝夕木立の頂上で鳴いていた頃であった。そして、丘の灌木地帯で聞こえたアオジの囀りや神社の森で、キー、コー、キーと静かに響いていたイカルの鳴きが止った夏の終りになって、やっと家ができた。

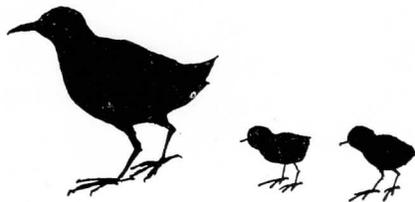
クロツグミは私の好きな鳥の一つである。毎年、藻岩山のコブツが白い花をつけはじめる頃になると、朝早くから、ときによっては未だ薄暗いうちにかん高い声で鳴きだす。少年時代行きつけの小鳥屋で、彼の毎朝の食膳

はほかの摺餌の鳥達の残飯にいくらかの新物を加えたものであった。アパートの隣人達がスウィーパー(掃除役)によせる卑しみのまなざしのなかで、彼は恬淡として歌っていたのを思い出す。

門口に立つと藻岩山の姿が目に入る。麗かな春の朝、その雄大な眺めの中からウグイスの声が聞えてくる。杜牧の「千里鶯鳴いて緑紅に映ず」には及ばないとしても聞いていて楽しい。飼鳥では、12月になると明るいつころに置く時間を少しずつ長くして、正月にはフォルティンモで鳴かせたが、自然の方がずっと長閑で安心して聞ける。

藤巻裕蔵氏の調査によれば、クロツグミとウグイスが藻岩山に姿を現わすのは、5月の同時期とされている。私がウグイスよりクロツグミの声に春を感じるのは、彼は少々風の寒い日でも、梢で大きな声で鳴くので、そう思うのかも知れない。

我が家が建ってから4年、その間に周囲は随分と変わって来た。セリ、ススキ、ガマが生い茂って、饒舌なヨシキリや戸を叩く音を聞かせてくれたヒクイナの棲家は宅地になった。千葉から訪ねて来た兄が、旅の仮枕に眠れず、「みみなりや、まくら辺遠く、くいな打つ」とよんだ句も、これで第一巻の終りになってしまった。更に今年、谷を渡った丘で造成工事がはじまり、朝から晩までブルの騒音が響いていた。あまつさえ、今度は市役所から道路拡幅で我が領土の割譲を求めてきた。ここは野鳥のためにナナカマド、ツリバナ、マユミ、コマユミ、



ツルウメモドキ、オノコを自分の手で植え込み、地面には苔をはりつめた美し<sup>うま</sup>王国である。そしてヒガラ、シジュウカラ、ツグミ、アカハラ、シメ、レンジャク、ヒヨドリ、キジバトなどの来訪を受けているのだ。

丘の造成工事がたけなわになって、緑の起伏は削り取られ赤い腹をさらけ出し、排土を谷に落しはじめた。崖の肩から谷にかけて植えられてあった200本余りの落葉松は、土や石をかぶり、やがて頭を谷に向けて倒れ討死してしまった。最後には、これも姿を消してしまった。この落葉松林に来たクロツグミや籐のウグイスの声は、もう来年から聞くことができなくなった。動物好きの英国人なら野鳥のために、せめて崖の落葉松林はリザーブするだろうと口惜しい。

どうも日本人というのは、自分の庭とか身辺的なマイクロの世界では花鳥風月を愛し、風流ぶっているが、マクロの世界に入ると一変して略奪者となり破壊者となってしまう。旅の恥はかき棄てというの、旅というマクロ的な空間のなかで、感情とか理性は全く希薄になってしまうということなのだろう。野でも山でもマイカー族が空缶や弁当がらを棄てる無神経さには驚く。列島改造論にしても、自然の保存について十分考慮して欲しい。手元の「Where to watch birds」(John Gooders)という本には、数多くの野鳥観察者のためイングランド、スコットランド、ウェールズの500個以上もの観察地を案内している。どこかの国の釣の穴場百選などというのとわけが違ふ。位置や環境について詳しく述べた上、四季毎に野鳥の種類を紹介している。きょうあって、あすはわからぬというのではなさそうである。本の末尾には野鳥観察者の心得や田舎の野外に於ての心得まで載せて、

自然に対する配慮をしている。

ところで、1930年3月、ロンドン郊外のゴールドスグリーンの下宿で、福原麟太郎氏は次のような日を送っている。

3月も末に近づくと、もう春が迫ったことに気づく。……朝、ねどこの中でかすかに意識がさめ始めるとき、まず耳に入るのは、窓の外の小鳥の声である。ツグミ、クロツグミ、スズメ、ムクドリ、その声をききわけようとして、まだ目をつむったままである。……、住宅町のこの辺のどこにも生け垣があって……よく見ると、サンザシの無数の小枝には、もう樹液がみなぎっているらしく、青味を帯びて、小さな小さな芽をあちこちにふき出しているのだ。(全集随筆Ⅱ身辺)20数年たって、彼はここを再び訪ねる。下宿のところにきて、昔のままの低い門のかけ金を外してドアをノックする。その昔この家の女中であったメアリーが出てきて再会する。

昔、文理科大学の構内で、たった一度だけお見かけしたことがあった背の低い教授が、ただ、そうっと、ふらふら歩いて、ホールズウェル通り42番地を訪ねる姿を思い浮かべる。そして、マラソンの選手をゴールに迎えるように、下宿はもう少しです、もう少しですと心から拍手を送る。拍手は教授にだけではなかった。随筆にはそのことにふれていないのに、この住宅町のサンザシの生け垣は少しも変わっていない。春が訪れる頃になると、クロツグミやほかの鳥たちの声は、今も昔と同じように聞えるのだと、私のセンチメンタルジャーニー(心の旅路)に浮かんでくるたたずまいに、拍手を送っているのであった。

## 稚内でコシアカツバメ繁殖

先号でお知らせした稚内西小中学校(稚内市豊浜)のコシアカツバメは、繁殖に成功した。

同校の対馬勉校長の観察によると、コシアカツバメの渡来は7月中旬で、成鳥6羽が出現し、そのうち2羽がのこって同校体育館に営巣した。しかし、その後も他の個体が学校付近に姿をみせたことがある由で、或いは近くで別のつがいが営巣した可能性もある。

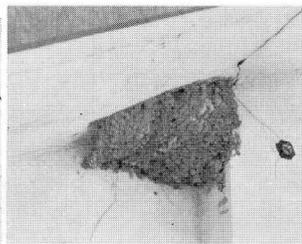
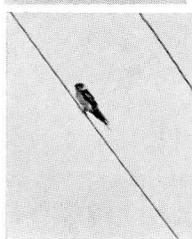
同校のつがいは9月中旬に4羽のヒナを巣立ちさせた。しかし、巣立ち直後に長雨が続いたためか、幼鳥は1羽しかみられなくなった。この幼鳥と成鳥2羽、計3羽は引き続き学校付近で生活していたが、10月6日に渡去したらしく、以後観察されていない。

北大阿部助教授と私は9月27日に同校を訪れ、対馬先生のご案内でこの家族を観察したが、かつて北陸地方で見たものに比較して、上尾筒や腹面が著しく淡色

である印象を受けた。

なお、行方不明になった幼鳥3羽のうちの1羽と思われるもののへい死体が9月18日に同校付近で拾得され、野幌記念館に収容された。

コシアカツバメの繁殖記録は従来東北地方の中部までで、北海道ではこれがはじめてである。(百武充)



## 歩く道具

— 冬の探鳥会のために —

藤 卷 裕 蔵

探鳥会というと鳥たちがよく唄う春と夏ときまっているようである。だが、だんだんと「鳥キチ」が増えてくると、これだけではものたりなくなり、冬にも鳥を見に行こうという声も出てくるのではなかろうか。こんなことを考え、冬の探鳥会に必要な道具を紹介してみたい。

北海道の冬というと、雪の存在を忘れることはできない。夏山の探鳥会は登山靴で、海岸でシギ・チドリを見るときはゴム長靴で、というように、冬にも適当な「はきもの」が必要である。これには、かんじきとスキーがある。これまでの私の経験では、かんじきは深く埋まり歩きにくく、かえって疲れるようである。スキーの方がよいが、いまはやりのゲレンデ用スキーは、かかとがあらがないので、歩くのには適していない。

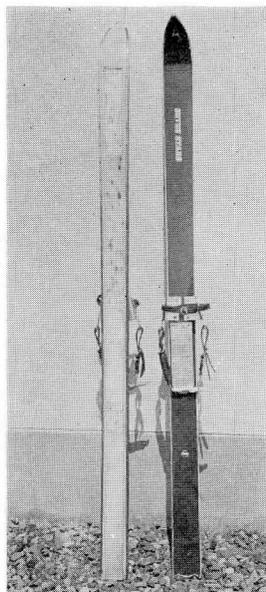
現在、私が使っている調査用のスキーを、一つの例として紹介しよう（写真）。長さは160cm。縮具は革製で、かかとがあがるようになっていて、スキーの裏には、両側わずかの幅を残してトップからテールまでシールがはりつけてある。いわゆる「ストー」といっているものである。（実用的には、シールの長さはスキー全長の3分の2程度でもよい）。もちろん、これは歩き専用なので斜面をすべって楽しむことはできない。これで歩けば、登りくだりは自由自在、多少起伏のある所を歩くと、このストーのよさが発揮される。

このようなスキーを新調しなくても、古くなったスキーの縮具をとりかえ、シールを併用してもよい。この縮具は、山の道具専門店で扱っている（例えば秀岳荘：札幌市北13西4）。この場合、単板スキーの方が軽くて歩くのにらくである。

このほか、歩くためのスキーとしてはレース用のスキーがある。ワックスの使用法などめんどろな点もあるが軽さと歩きやすさの点では、ストーよりもよい。ただ、レース・スキー用の革靴は浅く、雪がはいりやすいので長時間歩くときには、雪がはいらないような工夫が必要である。（ゴム製の靴だと深く雪ははいらないが、長時間はいてると汗で足がつめなくなる欠点がある）。

私は、長時間雪の上で観察するときには、足がつめたくなぬように登山靴をはいてストーを用い、短時間の観察にはレース用のスキーを利用している。

ここに紹介したのは、私が使用している方法ですが、ほかにより方法があれば、お教え下さい。



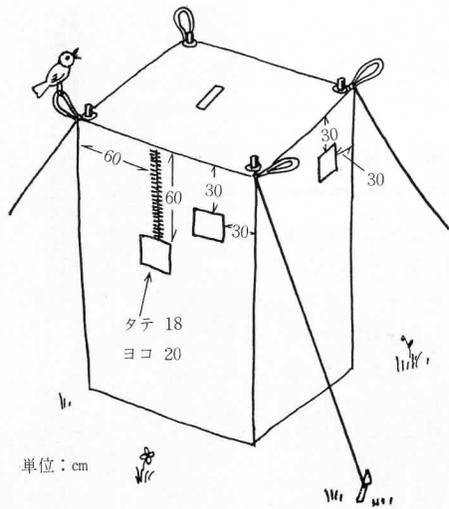
## ブラインドの作り方、使い方

小 川 巖

野鳥に影響を及ぼさずに、長時間観察するためのブラインド（野鳥観察用テント）の必要性を感じて人は意外と多いのではないだろうか。ところがキャンプ用のテントとちがって市販されていないため、自分で作るか加工業者に頼まなければならない煩わしさから、実際に持っている人は非常に少ないのには驚かされる。実はそういう私自身も、鳥類の研究に携わっているがらブラインドなしでお茶を濁してきた一人であるが、今年になってようやくブラインドをもつ身分になれた。これまで私の第1号に始まり、友人、知人が次々と同型のブラインドを作っていたことよってすでに第5号までできてい

る。1号にくらべればかなり改良され、それだけに使いやすくなっている。今回はブラインドの作り方をまず述べてから、今シーズン中に実際に使ってみた結果痛感した、使い方によっては両刃の剣ともなるブラインド使用に際しての留意点を明らかにして、野鳥観察の参考になりたい。

まず作り方について。御存じの方も多と思うが、図のように底辺が正方形をした直方体をしているのがふつうである。従来作られたブラインドは底辺の一边が1m位のものが多かった。実際に1mの枠を作ってみればわかる通り、カメラをセットして椅子やこれに代るもの



単位：cm

置いてみれば、少々手狭まであることが知れるはずだ。大きくて広いに越したことはないが、ブラインドを張る手間や、条件の悪い所に張ること、そして大きければそれだけ布地を余計に使う経費高を考えに入れれば、大きければよいというものではない。結局のところ1.2 mに落ちついた。これだけの広さがあれば、三脚を立てて座っても余裕があるし、もう1人や2人入ることができる。高さは後述の理由から1.5 mにするとよい。

正面ののぞき窓は1つで間にあうと思いがちだが、実際は複数個あった方がよい。カメラとプロミナーを同時にセットすることもあるし、2人が同時に観察することだってあるからである。窓の大きさは1辺が20 cm前後がちょうどよいように思う。のぞき窓の他に、正面中央部を上から下にファスナーを取りつけた。これは場合によっては、のぞき窓に代用することができることによる。これなら高さを任意に調節することができ、思わぬ時に役に立つからである。この場合、一本のファスナーを上から下までつけるのではなく、何ヶ所かに区切って取りつけられれば、それぞれ独立したのぞき窓とすることができる。のぞき窓の蓋はテント式に紐でとめるよりは、マジックテープを使った方が手軽でよい。もちろん、マジックテープもファスナーも内側から取りつけることをお忘れなく。

出入口もファスナーを使った方が都合である。両サイドののぞき窓は不必要のようだけれど両側にいる鳥をみる場合に役に立つし、意外な効果は、真夏の炎天下、相当蒸し暑くなる内側に風を招き入れる「風穴」としても役に立つことである。

上部の四隅は蚊帳つり様のものを取りつける。林の中などで枝にひっかけるなど、思わぬ時に役立つからで、更に同じものを屋根中央につけておけば、ロープで引張ることによって雨を屋根に溜めることを防ぐので威力を発揮する。

布地はどんなものがよいか。私は薄手のナイロンで作った。これだと軽い上に安価で加工もしやすく雨もりもしない利点があるが、炎天下では内部がかなり熱せられることは避けられない。たたんだ時にナイロン以上にコンパクトにしたいなら、リツロンを使用するといいい。ただ防水性に優れている反面、照り返しでブラインド内がひどく蒸し暑くなることは覚悟しなければならない。要するに布地は何でもかまわないのだが、意外な落とし穴がある。それはリツロンなどの薄い布地だと、風が強いときなどパタパタはためいてしまい、その音に鳥がかなり神経質になってしまいかねないことである。薄い布を使用する際は、支柱（ポール）とを結びつけるとか、張り綱もしっかりしたものを使うようにする必要がある。色については茶、緑系統がよいことは言うまでもない。

付属品であるポールは市販されている1本50 cmのを3本つないで1.5 mの長さにするのが最適である。既製のポールを使えば自ずからブラインドの高さが決ってしまう。張り綱は四隅から1本づつ張れば十分で、ペグ、自在も当然必要になってくる。長時間の観察に当てるとすれば、当然居住性も問題になってくるので、グランドシートもあれば用意したいものの一つだ。

ブラインドの作り方を一通り述べてきたが、簡単なように思えても実はかなり細かい注意が払われているのである。これが、寝るための用に供されるテントとは大いに異なるところで、観察に便利のように作るのはもちろんのこと、鳥という相手があることを考えれば、当然の配慮なのである。まだ検討を加えるべき事柄はあるに違いない。

次に使用上の留意点を明らかにしておこう。ブラインドを使って観察するのは多くの場合、繁殖期であろう。つまり、卵またはヒナの時期というほとんど無防備に近い鳥を至近距離で観察しようというのだから、最大の注意を払っても払いすぎることではない。まず銘記すべきことは**ブラインドを過信するな**ということ。ブラインドを張ることによって、人間が直接見られないにしても、鳥にしてみれば、不自然なものが立っていることには変りない。ましてやのぞき窓から姿が見られるようでは、鳥の警戒を解くことはとうていできない。

まずブラインドを張る時期だが、**産卵初期とふ化直後はまず避けること**。前者の場合には、往々にして巣の放棄を招くからで、後者の場合には、ブラインドを張っている間中親鳥は巣を離れ、それが長くなると保温能力のないヒナは死に至るからで、30分も親が抱かないと、間違いなく死んでしまうことを覚えておかななくてはならない。従ってブラインドを張るのに、**できるだけ短時間で張るよう努めなくてはならない**。テントより張りづらいことははっきりしているので、練習を積むとか、人に手伝ってもらうのもよい。

## 『自然と生命のパレード』

スタアラー・浦本昌紀訳

「宇宙船地球号」という言いかたが近頃よく目につきます。地球とは宇宙船のようなごく限られた空間にすぎず、そこにある物質は有限であり、生命あるものはすべてなんらかの点でお互につながりをもっているということを表現したものです。そして生物相互間の関係を研究する学問——生態学（エコロジー）——がブームを呼び、たくさんの入門書が発売されました。

この本が訳されたのはもう10年以上昔のことで、エコロジーブームの生まれるずっと前です。しかし、生態学の基礎的な原理と考えかたを、豊富な実例を使って書いた初歩の解説書として、これよりすぐれたものはまだないように思われます。

1 haの土の中には、死んだものも含めると6.3 tものバクテリアが含まれていて、土を耕し、森を健康に保つために働いていること。シカを増やそうとしてオ

オカミを殺したら、かえってシカが減ってしまったことなど、自然の複雑なしくみがわかりやすい、すぐれた文章で表現されています。

自然を大切にしようという議論の主流は、かつての天然記念物的な考えかたから、自然のバランスをまもろうという考えに変わってきています。そのとき、基礎になるのが生態学の知識なのです。そして、それは一部の専門家だけの話ではなく、われわれ自然愛好者にとっても、考えを深め、ものを見方を広めるためには必要な知識ではないでしょうか。

なぜ自然を扱うのに慎重でなければならないか、なぜ自然をまもることが日本にとって必要なか、鳥の保護に少しでも関心のある人は一度読んでおくべき本といえます。（白楊社刊 650円）

なお、中学生程度向きに書かれた生態学の本もいくつか発行されていますが、その中から『生きている自然』（C・ハーシュ・日高敏隆、羽田節子訳、学研）をあげておきます。

張り終っていち早く用意を済ませたら、親鳥が巣に戻るまでジッと待つこと。相手はどこから見ているか知れないし、ほんの少しの動きにも敏感になっているからである。また、いくらブラインドだからといっても、巣のすぐ近くに張るのは慎しむべきことは言うまでもなく、あまり気にしない鳥であっても7～8mは離れること。アオジなどのように過敏な鳥の場合には、10数m離れたところに張っても巣を放棄してしまうことが多い。対象とする鳥の観察者に対する反応がどんなであるかはブラインド以前の問題として考えなければならぬ。

さて、どうやら親鳥も巣に戻り、眼前に展開されるシーンに接すれば、興味は尽きないものがある。それが突然ある日、巣から卵やヒナが消えてしまったとしたら、直接の下手人ではないにしろ後味の悪さと後悔の念を残すものだ。その主な原因の一つは、ブラインドを張る際に付近の草を踏み倒したりするため、イタチ、キツネ、ヘビあるいはカラスなどの捕食動物に狙われることである。それのみか人間による持ち去りもよくあることなので、踏み跡をつけないように心がけなければならない。イタチやヘビにはタバコの吸殻がこれらの動物に対する忌避剤的な効果もあるというから、巣の周囲にまく位の気をつかってもいいだろう。

最後に参考としてブラインド作製に要する費用をあげておくことにする。1辺が1.2 m、高さ1.5 mのブラインドを作るとすると、必要な布地は90cm幅のもので約12mである。価格はm当りナイロンの場合300円程度でビニロンだと4～500円位はするようだ。付属品として

はポールが2組（1組800円位）で1,600円位かかる。張り綱、ベグ、自在などで約1,000円、それにグランドシート（厚布地）が大体1,000円とみればよい。

もちろん、この他にファスナー、マジックテープなどの費用も含まなくてはならない。男でも少し器用な人なら丸1日かければ作れるという。それがダメなら母親、姉妹、あるいは彼女に頼んで作ってもいい。とりあえずポールは棒で代用し、張り綱、ベグあたりもありあわせで間に合やすことは可能だから、実費として4,000円もかければブラインドを自分のものにすることができる。

どうしても自分で作れないし、周囲に作ってくれる人がいなければ、テント業者に依頼する他ない。やはり縫うことにかけては本職だけあって、できあがりは上々だが、何しろ熟練の職人と言えどもブラインドなどは初めて手がけるに違いないから、ていねいに図示して手違いのないようにしたい。私が依頼した札幌テント（札幌市南1条西11丁目、電話231-2353）では加工賃、付属品すべて込みで約1万円と割安に作ってくれる。もちろんブラインド本体だけでも作ってくれるから、必要の向きは比較的仕事の混んでいない冬場に頼むとよいだろう。

なお、ブラインド作製に当っては、横須賀市博物館の柴田敏隆氏の御教示に負うところが多い。便利に使えたとすれば、それは氏のお陰というべきであろう。

（北大農学部応用動物学教室）

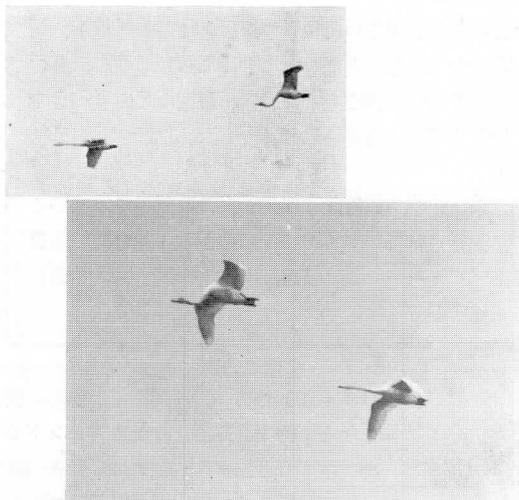


## この白鳥を探して下さい

玉田 誠

昭和47年4月22日の午後、原生花園付近で目撃した渡去白鳥群の中に、写真のように首が下方に折れ曲った奇形の白鳥が混っていました。先天的なものでしょうか？公害によるものでしょうか。再びその姿に接し無事をよるこびたいものです。見かけた方は月日及び場所を下記にご連絡くださいますように。

(網走市宇北浜 北浜中学校)



〔このように、外観上の奇形や異常は、鳥の個体識別には役に立つ特徴となります。他にも、この夏風蓮湖の春国岱にいたタンチョウの家族のうち、成鳥1羽は左足をケガでもしているのか、いつも半ばぶら下げたまま飛ん

でいました。この個体が釧路地方の給餌場に姿を見せたら面白いと思います。もっとも、このような異常は、しばしば生存するためには不利に作用するので、鳥は長く生きられないことが多いのですが……。 (事務局)〕

### タンチョウの山崎さん、叙勲さる

阿寒町の山崎さん、といえば、ああ、あのタンチョウのくるところか、と気付く方も多いことでしょう。

その山崎定次郎さん(83歳)が、20余年にわたるタンチョウ保護の功績により、勲5等瑞宝章を受けられ、11月8日伝達されました。おめでとうございます。

### ◆クロコシジロウミツバメ

10月9日付北海道新聞によると、上士幌町糠平の商店に10月5日クロコシジロウミツバメが飛びこみ、近くの町立東大雪博物館に収容されました。

この鳥は黒色の小型の海鳥で、岩手県の三貫島などが繁殖地として知られてまいすが、北海道からはこれがはじめての記録です。

### ◆探鳥会雨で連続ノックアウト

9月17日に予定していた鶴川探鳥会と10月22日に予定していた野幌森林公園探鳥会は、ともに雨にたたられて中止になりました。過去2年間、一度も雨に会わずにすんでいた探鳥会が、2回も続けて中止されたのは、ほんとうにツイテナイとしかいいようがありません。事務局一同、ガッカリするやら、よほどだれかの精進が悪かったかと、お互いの顔を見くらべるやら……。

## <事務局だより>

- ◇ 一夜吹き荒れたモンスーンが名残りの紅葉をみるかげもなく散らしたと思ったら、すぐそのあとに吹雪が続いて、短い秋はあっという間に去ってしまったようです。おかわりありませんか。野鳥だより12号がようやくできました。表紙の写真が大きくなりましたが、ご意見はいかがでしょう。これから、タテ位置で8切りまで伸ばせる写真が確保できればこのようにしたいと思います。どうぞ作品をお寄せください。
- ◇ この稿を書いていたら、デンバー市がオリンピックを返上するというニュースが入ってきました。オリンピックの開催を住民投票にかける行政機関の態度も、返上派が多数になる市民の意識も、それぞれ立派なものだと感心しました。その理由が、税金の

むだ使いと自然破壊に反対、というのですから、なおさらです。

- ◇ 札幌市内の円山で、100羽くらいのイスカの群をみた、と会員の羽田さんから連絡がありました。その中にはナキイスカが2羽とギンザンマシコらしいのも入っていたそうです。本号の藤巻さんの記事にもあるように、冬でも多少の工夫とヤル気さえあれば、けっこう鳥は見られるものです。ひとつこの冬あたり、日本最初(?)のスキー探鳥会など、企画してみたいものです。

- ◇ 13号の原稿は1月15日までにお寄せください。送り先は事務局(道庁自然保護課野生鳥獣係内:札幌市北3条西6丁目 ☎060 TEL 231-4111-内線3895)まで。

それではまた来年。どうぞお大事にお過ごしください。